

舞妓さんについて

「舞妓さん」の暮らし

京都の中心部に残る古い町並みには、「お茶屋さん」と呼ばれる宴席の会場が点在します。いずれも長い伝統と格式を受け継いだ最上のおもてなしが受けられる場で、夜ともなると、華やかな衣装の「舞妓（まいこ）さん」や「芸妓（げいこ）さん」が行き交います。こうした場所は、祇園甲部（ぎおんこうぶ）・宮川町（みやがわちょう）・祇園東（ぎおんひがし）・先斗町（ぼんとちょう）・上七軒（かみしちけん）と呼ばれる5つのエリアがあります。それぞれの場所に宴席の場となる「お茶屋さん」と、「屋形」（やかた）と呼ばれる「舞妓さん」や「芸妓さん」の所属する「家」があるのは同じですが、舞やしきたりなどはエリアによって微妙に異なっています。

「お茶屋さん」の利用は、原則として「一見（いちげん）さんお断り」となっており、初めての方は紹介がないと利用することができません。しかし、「都をどり」「京おどり」などの舞台上、「舞妓さん」や「芸妓さん」の舞姿を鑑賞することができます。

「屋形」をとりしきる女性は、「舞妓さん」や「芸妓さん」から「おかあさん」と呼ばれ、生活全体から修行まで、やさしくときには厳しく指導します。「屋形」は、家族のような存在です。

「舞妓さん」と日本の四季

「舞妓さん」の慣習は、四季の移ろいと密接な関係があります。

例えば髪を飾る「花かんざし」は月ごとに変りますし、舞も季節によって演目が変わります。年始年末や夏季には独特の作法のごあいさつまわりがあり、節分にはさまざまな扮装をしてお座敷をまわる「お化け」と呼ばれる風習があるなど、「舞妓さん」の暮らしには、四季を風流に楽しむ日本の心が息づいています。

「舞妓さん」と「芸妓さん」

立ち居ふるまいからことばづかい、舞や鳴物、長唄から常磐津、お茶など日本の伝統的な芸能を身に付けた「舞妓さん」と「芸妓さん」は、いわばおもてなしのプロフェッショナルです。舞や唄などで宴席を盛り上げるほか、初対面の方もくつろがせ、親しくなる雰囲気を作ることができます。古都の情緒に華を添える「舞妓さん」と「芸妓さん」は、日本はもとより海外の方にも広く人気を集めています。

「舞妓さん」の衣装は、地毛の日本髪に花かんざし、肩と袖を縫い上げされた振り袖にだらりの帯、履き物は「おこぼ」と決まっており、初々しく愛らしい姿が特徴です。20歳前後で「舞妓」を卒業すると、「芸妓」となります。白襟で袖は短く太鼓の帯と、しっとりした粋な風情になります。「舞妓」時代も経験年数によって、髪型や着物や帯、かんざしなどが変わっていきます。

「舞妓さん」や「芸妓さん」が身に付ける衣装や扇、団扇などは、いずれも長い年月で培われてきた日本の伝統工芸品です。



【千社札】（せんじゃふだ）

「舞妓さん」や「芸妓さん」の名刺のようなもので、シールになっています。「舞妓さん」の千社札は、福が「舞妓む（舞い込む）」として縁起が良いとされています。